

（学校の「アレ」は今）腰洗い槽 つかって「冷たっ」 思い出のあの臭い

2023/08/28 朝日新聞 朝刊 17ページ 1494文字

小中学生のころ、学校でよく使っていた「アレ」。20～40代の記者たちが探してみると、教育や社会の変化が見えてきました。3回目は「腰洗い槽」です。

■濾過装置が普及し水質向上、使用の義務なくなる

1990年7月1日に放送されたアニメ「ちびまる子ちゃん プールびらき」。プール授業を前に、まる子たちは、震えながら冷たいシャワーを浴びる。水を掛け合ったり、滝修行を始めたり、髪を洗ったり。そこにキートン山田さんのナレーションが入る。「シャワーの後は消毒である」

まる子たちは腰洗い槽へ。「この消毒液の臭いをかぐと、プールの時間だなんて思うよ」「今お尻のばい菌、死んでるかな？」

そんなまる子たちの会話は、当時小学4年生だった記者にとって日常そのものだった。

だが今、「腰洗い槽」は多くの小中学校で使われていない。もしくは、ない。

腰洗い槽は、プールに入る前後につかる深さ70センチほどの水槽。50年代に東京都が条例で設置を義務づけたのを機に広がっていった。

学校体育を管轄するスポーツ庁によると、かつてのプールは何日か使った後に、水を総入れ替えする方式だった。担当者は「最後の方は、水質が安定しているとはいえない状態だった」。

そのため、下半身を消毒することで、少しでも水質をよくしようというのが腰洗い槽の役割だったという。市民プールでも設置された。ただ、90年代から学校のプールは濾過（ろか）装置を備え付け始め、今では95%以上のプールに設置されている。「今は必ずしも腰洗い槽を必要とはしない」と担当者は話す。

*

<塩素に不安の声も> 80年代ごろには、腰洗い槽の塩素に対し、不安の声もあった。腰洗い槽の遊離残留塩素濃度は1リットルあたり50～100ミリグラム。プールで推奨される濃度の100倍となることも。親たちから「皮膚に悪い」「目が炎症を起こしてしまう」と心配する声があがり、水泳の授業のボイコットが起きるほど問題になっていった。

そんなことから92年、厚生省（当時）が市民プールでは「廃止」と方針を変更。それに続き、各地の教育委員会でも義務ではなくなっていた。現在使われている「学校環境衛生管理マニュアル」（2018年度改訂）でも「衛生管理上有効な方法であるが、関係者の指導助言を得る」とされ、必須ではなくなっている。

*

<地獄のシャワーは> 今、多くの学校ではシャワーを浴びた後に、プールという流れが主流だ。そのシャワーにも変化がある。

東京都豊島区では、区立小中学校30校のうち27校が温水シャワーになっている。10年から改修を始め、残りの3校も改修していくという。

全国的にも、温水シャワーを取り付ける学校は増えている。かつてはその冷たさに子どもたちから「地獄のシャワー」と恐れられてきたが、東京都国立市の小学校教員は「小学校のプールも快適に変わりつつある。『冷たっ』と児童同士で楽しんだ思い出はなくなりつつあり、もう地獄ではありません」。

校外の施設を借りて水泳の授業をする動きも相次いでいる。学校向けプール製造の最大手「ヤマハ発動機」（本社・静岡県）は、プール事業の営業活動を来年3月末で終了する。学校が自前の施設を必要としなくなり、需要が減っているのだという。（江戸川夏樹）

◆「学校の『アレ』は今」は随時掲載します。思い出に残る、学校の「アレ」をお寄せ下さい。

◇より詳細な内容や、焼却炉やソフト麺を扱った「学校の『アレ』は今」シリーズは、朝日新聞デジタルで読むことができます。